

中国蘇南農村における家族形態と家族内扶養の性格

—開弦弓村を事例に

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 地域連携経済学 王 エン

1. 問題意識と課題

多くの先進国のように、中国でも高齢化は大きな社会問題となっている。そして、高齢者の割合は農村人口の14.8%を超え、都市より農村の高齢化が一層深刻となっている。自己扶養や社会的扶養に十分頼れない現状のなかでは、農村の高齢者扶養の担い手は依然として家族である。しかし、改革開放後、一人っ子政策や経済発展による人口移動の影響を受け、農村において核家族化や出稼ぎによる若年層の流出が進んでいる。それに伴い、伝統的な「親孝行」の道德観も薄れ、世代間のつながりも弱くなり、伝統的な直系家族が動揺していると考えられる。本論文は、直系家族が基本的には維持されている蘇南地域の開弦弓村を事例に、その家族形態と世代間の扶養形態を解明し、その性格を検討する。

2. 論文の構成

第1章は中国の家族の特徴、機能と世代間関係について説明する。第2章は建国直後、計画経済期、改革開放後の3区分により、国家政策面からの高齢者に対する扶養の歴史を整理し、現段階における出稼ぎによる人口移動と一人っ子政策によってもたらされた農村家族の空洞化問題を指摘する。第3章は開弦弓村の村民委員会資料に基づいて村の人口と家族形態を明らかにする。そして、聞き取り調査を行った19戸の家族の実態から、高齢者とその子世代の間の家族扶養について検討を行う。

3. 結果と考察

対象地の開弦弓村は、人口減少と少子高齢化が進行している。家族構成は同居の3世代直系家族は依然として村の大半を占めている。世代間扶養は家族が同居或いは近居していることによって維持されてきたことが特徴である。そして、家族内扶養の形態では、親から子供へ結婚資金・住宅資金の提供と、祖母が孫の保育に責任をもっていることが特徴である。高齢者に対する扶養については、高齢者は養老年金の受給があり、重病時以外には基本的に自立していると考えられる。高齢者の精神面では家族の支えが何よりも第一位にあり、子供のための貯金や孫の保育など家族に貢献できることから生きがいを感じていると考える。

4. まとめ

一人っ子政策の実施以降に、誕生した子供も結婚適齢期に向かっているが、直面する問題は親4人と子供1人の扶養という重荷である。親への扶養と子育てが重なる時期には、特に親と別居している場合には親を犠牲にすることが多い。こういう家族扶養の限界性は全国的傾向にあるが、開弦弓村では農村工業の発展により他出者は少なく、少子高齢化が進んでいるとはいえ、多くの高齢者が子夫婦と同居・近居する形で家族内扶養が維持されてきた。しかも、養老年金や医療保険が普及しているので、子供からの経済的援助は最小限となっており、経済面については、子夫婦の負担は軽減されていると言える。今後、家族扶養と社会的扶養をどうやって有機的に組み合わせるのが課題である。